平成３１年２月１９日

平成３０年度　鳥取市中堅教諭等資質向上研修アンケート調査結果

アンケート調査の趣旨

鳥取市では、本市教育の最重要課題である学校不適応解消（未然防止）・学力向上に向け、特別支援教育の視点を基盤にした研修をしています。

鳥取市教育センターは「研修で学校が変わる」を合言葉に、中堅教諭等資質向上研修を核として複数のキャリアステージや職務とのコラボ研修を実施し、効果的に研修成果を学校運営に活かすマネジメントサイクルの確立を図っています。

本アンケート調査では、鳥取市中堅教諭等資質向上研修対象者が研修したことを校内で協働しながら実践に活かし、研修成果を還元している状況を把握するとともに、今後の研修企画の資料とすることを目的としています。

※アンケート期間　平成３１年１月２３日～１月３１日
※アンケート対象　中堅教諭等資質向上研修対象者１３名（１１校）

考察と展望

（○：考察、▲：課題、◆：展望）

○中堅教諭等資質向上研修対象者（以下、中堅教諭）が中心となって、学校運営に積極的に関わろうとする意識が高まってきている。

○中堅教諭は、研修で得た知識や気づきを他の職員と連携して自校での取組に活かそうとしており、専門部会やプロジェクトチームのリーダーとなって取組を推進していることがうかがえる。

○中堅教諭のミドルリーダーとしての自覚が高まり、若手育成のメンターとして校内ＯＪＴを推進していることがうかがえる。

▲校内研修や職員会議の中で研修報告の時間を確保することが難しい。

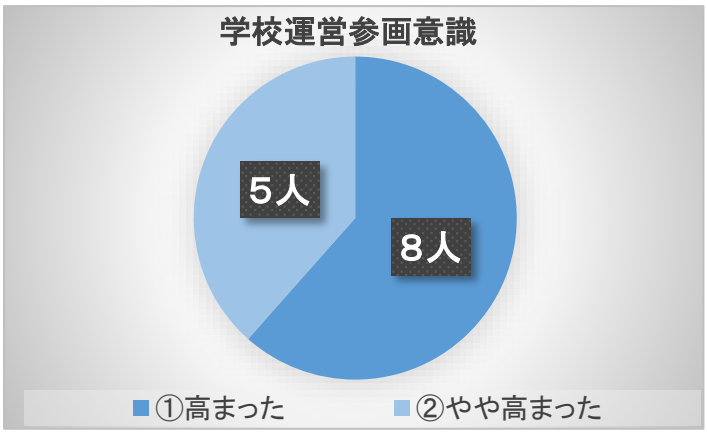
▲集合研修の中で、中堅教諭同士で情報交換したり、協議したりする時間を十分に確保できなかった。

◆来年度は、集合研修の中で、中堅教諭同士で情報交換したり、協議したりする時間を確保し、他者のアイデアを共有したり、新たな気づきを得ることで講義・演習内容の理解をさらに深め、実践意欲をさらに高めたい。

◆中堅教諭は、校外研修で学んだ特別支援教育の視点を基盤とした児童生徒理解の手法や授業づくりの工夫について、意欲的に自身の実践に取り入れている。研修での学びを校内で共有するために、来年度以降も、「研修のまとめ」を発行していく。

◆来年度も中堅教諭等資質向上研修を中核として、異なるキャリアステージ・職務とのコラボ研修を実施し、中堅教諭のミドルリーダーとしての自覚を高め、各世代間の連携協働による校内ＯＪＴの活性化を図りたい。

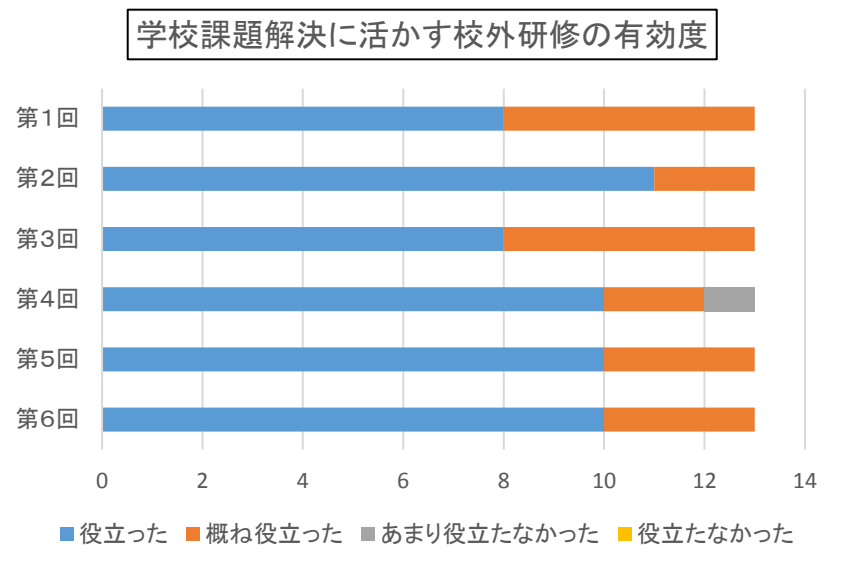
（１）研修受講者の**学校運営参画意識の変化**



＜回答内容＞
①高まった…８人
②やや高まった…５人

＜考察＞
○全員が肯定的に回答している。研修で学んだことを、学校課題解決に向けた取組につなげようとする意識が高まってきている。

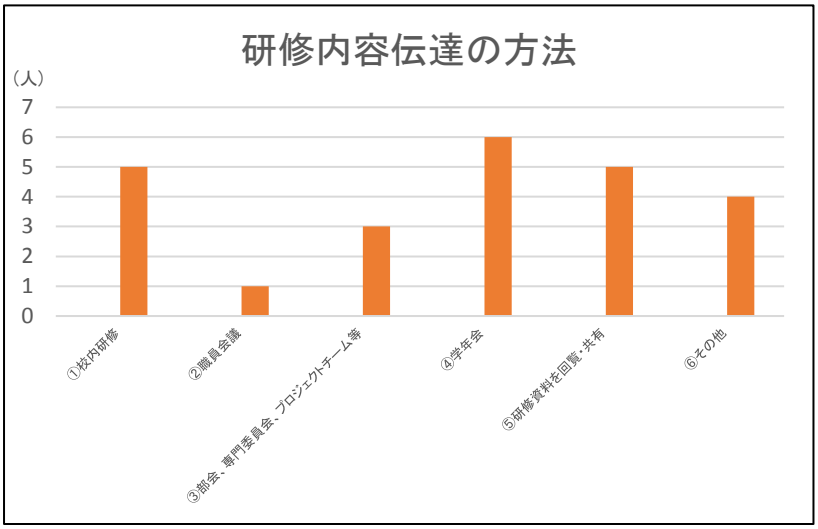
（２） 学校課題解決に活かす校外研修の有効度



＜回答内容＞　※複数回答可
役立った…第１回：　８人
第２回：１１人
第３回：　８人
第４回：１０人
第５回：１０人
第６回：１０人

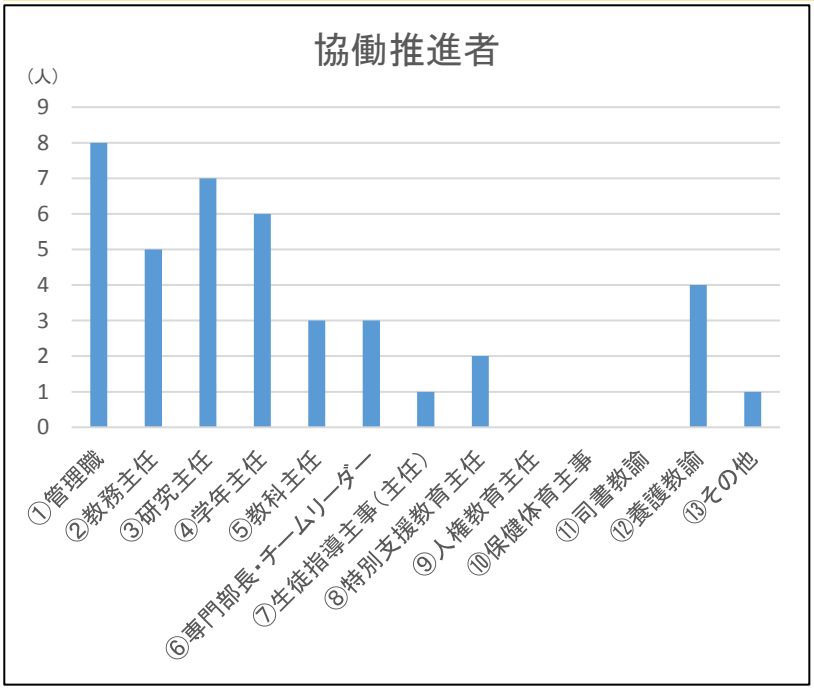
＜考察＞
〇校外研修の研修内容は、学校課題解決に概ね活かされている。

（３） 研修内容伝達の方法



＜回答内容＞　※複数回答可
④学年会…６人
①校内研修…５人
⑤研修資料を回覧・共有…５人
＜考察＞
〇校内研修や学年会、職員会等で、校外研修の研修内容を報告・伝達する機会が設定されている。
〇中堅教諭が研修資料を回覧し、全職員に研修内容の情報発信を行っている。
▲校内研修や職員会での研修報告の時間確保が難しい現状がある。

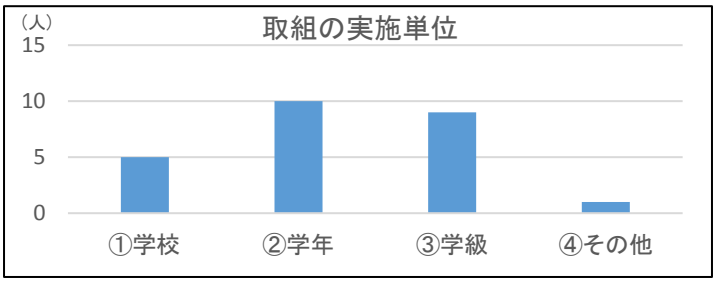
（４） 研修内容を学校課題解決に活かす協働推進者



＜回答内容＞　※複数回答可
①管理職……８人
③研究主任…７人
④学年主任…６人
②教務主任…５人
⑫養護教諭…４人

＜考察＞
〇中堅教諭は、管理職に研修内容を報告し、校内での取組に関する相談を行っていることがうかがえる。
〇研究主任や教務主任と連携することで、全校での組織的な取組につなげようとしていることがうかがえる。

（５） 研修内容を学校課題解決に活かす**取組の実施単位**



＜回答内容＞　※複数回答可
②学年…１０人　③学級…９人　①学校…５人

＜考察＞
〇中堅教諭は、研修内容を活かした取組を学級や学年団で実践し、学校への取組につなげようとしていることがうかがえる。

（６） 研修内容を学校課題解決に活かす**取組の具体的内容**

①どのような取組を行いましたか。	②取組によってどのような効果がありましたか。
＜回答内容＞	
特別支援教育の視点を基盤とした児童生徒理解	
・研修で学んだことを校内研修で紹介した。子どもへの関わり方のポイントやピアサポートの仕方などを紹介し、各学年の継続的な手立てを話し合えるようにした。 ・アセスメントシートを作成するときにどのような視点で児童を見取り、記入していくとよいかという観点に立ち、既存のアセスメントシートを改良し、校区の不適応の会でも提案した。 ・アセスを実施し、その結果をもとに職員研修を行い、内容理解や分析演習を行った。ＳＥＬ－８Ｓを授業公開するとともに、研究協議会において理解を深めた。 ・好ましい行動や習慣の獲得のため、有効と思われる教材としてＳＥＬ－８Ｓを紹介し、本校生徒に必要でわかりやすいと思われるものを選定。自立活動で使用し、教室・廊下掲示を行った。 ・不登校に陥りそうな生徒に気づいたら、すぐにブロック長、養護教諭や他の先生方と相談をし、学級担任と連携し、素早い対応を行えた。	・どの児童についてアセスメントシートを作成するとよいのか話し合う機会が増え、不適応解消のために全職員で気をつけて児童を見ていくことができた。 ・アセスおよびＳＥＬ－８Ｓについての教職員の理解が深まり、来年度からの実施に向けての検討の材料となった。 ・ＳＥＬ－８Ｓの取り組みにより、あいさつやお辞儀の仕方など、相手に対する振る舞い方の質の向上により、少しずつ相手を気遣いながら円滑なコミュニケーションが取れるようになってきた。 ・全教職員が課題を認識し、一人一人の児童に対して一貫した対応で臨めるようになり、関係機関との適切な連携につながった。 ・教材検討を行い、生徒の実態把握や支援・指導のポイントを共通理解しながら実践に繋げることができた。 ・生徒への素早い対応ができ、不登校未然防止ができていると感じる。
カリキュラム・マネジメント、授業改善	
・学力向上、学び合いの学習の実現に向けて、授業改善に取り組んだ。その際、「思考ツール」を活用した授業作りを行った。また、授業改善、学級経営等の研修を受け、自分の実践に取り入れた。 ・総合的な学習の時間の年計が他の学校と大きく違い、古い形のままになっていることに気が付いた。年計を見直し、作りかえていく必要があるという思いを管理職や総合的な学習の時間の担当教員に伝え、企画委員会等で取り上げた。	・考えること、表現することが苦手な児童が、自分の考えをもてるようになり、何をどのように考えればよいかが理解できる場面があった。 ・今年度中に年計を大きく作り直す時間を設定することは難しかったが、本年度の単元を土台としながら、来年度からの年計の見直しをしていく方向で進んでいる。また、評価の観点についても見直しをしていきたい。
中堅教諭を核とした校内ＯＪＴの推進	
・職員同士の連携を深められるように、意識して声かけを行った。 ・学年団の若手の先生方に研修で学んだ取り組みを紹介し、学級経営の一助にした。	・自分自身が、職員同士をつなぐ役割であることを少しずつ自覚してきた。 ・一人一人への手立てと見立てを提示した。生徒同士の関わりや変容が捉えやすくなった。

＜考察＞
〇中堅教諭は、特別支援教育の視点を基盤とした児童生徒理解やアセス、ＳＥＬ－８Ｓ等の手法について、校外研修での学びを校内研修で報告・伝達し、児童生徒への日々の支援・指導につなげようとしていることがうかがえる。
◆中堅教諭は、分掌での取組や指導助言体験、日々の授業公開等をとおして、校内ＯＪＴの推進に取り組んできた。来年度以降も各世代間の連携協働意識を向上させるために、ミドルリーダーとしてベテランと若手をつなぐという意識を高める研修を企画する。